

●モノグラフ小学生ナウ



夏休み

vol.2-11



©1983(株)福武書店 教育研究所/加藤智博・賀川雅子
奈良教育大学教授 深谷昌志・東京都渋谷区立猿楽小学校教諭 土橋 穂
千葉県船橋市立高根台第一小学校教諭 新井 誠

目次

特集／夏休みにはビッグな体験を	2
調査レポート／夏休み	
要約	10
1. とても楽しい夏休み	12
● 94%の子どもが楽しいと感じている	13
● どんな時が楽しいか	14
● もっと夏休みを	16
2. 夏休みの生活	18
● 夏休みの1日	18
● 計画は実行されているのか	22
● 夏休みの宿題	25
● 勉強についての気持ち	26
● 子どもたちの生活記録から	27
3. 夏休みの意義	30
● ためになったこと	31
● 85%が旅行をする	32
● 自由研究の持つ意味	34
シリーズ／子ども考現学	
子どもの姿・昔と今(9) 修学旅行	37
資料1・調査票見本	42
資料2・学年・性別集計表	48

特集●

夏休みにはビッグな体験を

奈良教育大学教授 深谷昌志



8週間のキャンプ

この頃、夏休みや冬休みが、なんのために

あるのか、あるいは、本当に必要なのかと思うことが多い。せっかく、夏休みに入ったのに、塾通いをしたり、家の中でぶらぶらしていたのでは、なんのための休みなのかわから

なくなる。そして、そうした生活を送らせるくらいなら、学校があった方がよいのではという気がしてくる。

日本だけを視野におくと、夏休みが長いように思う。しかし、欧米の学校の夏休みは、日本より、はるかに長い。そうした中では、フランスのグラン・バカンがよく知られている。7月に入ると、家族単位で、地中海やスペインへと旅行する民族の大移動が始まる。もちろん、家族と離れて、キャンプへ参加する子どもも少なくない。

評論家の桐島洋子さんが、お子さんたちとアメリカで生活した記録、『マザー・グースと3匹の子豚たち』の中に、次のような一節がある。

「アメリカに日本の学習塾のようなものは一向に見当たらないが、そのかわり夏休み中、子供をあずかるサマー・キャンプが無数にあり、その広告がニューヨーク・タイムズの日曜版などにいつもギッシリひしめいている」

「どのキャンプも森あり湖あり数万坪の敷地を持った別天地で、水泳、ヨット、乗馬、テニス、その他ほぼすべてのスポーツをはじめ、図画工作、音楽、演劇などの設備万端がととのい、それぞれに専門の教師がいる。また、生徒5、6人に一人ずつのカウンセラーがついて、キャンプで起居を共にしながら生活の指導にあたる」

こうしたサマー・キャンプは、主催者により、当然のことながら、期間や費用が違ってくるが、8週間で、1200ドル(約30万円)あたりが標準的だと言う。

このところ、アメリカに限らず、海外の学校に子どもを通わせた体験レポートを見かけ

る機会が多い。確かに、世界の中で、日本の学校はかなり風変わりな特性を持っているから、日本の学校をイメージを抱いて、海外へ出かけ、子どもたちを現地の学校に在籍させればとまどうことが多かろう。それだけに、そうした文化ショックを書き綴ったレポートは、現地の学校という鏡を通して、日本の学校のあり方を考えさせる意味で、示唆に富む内容を含んでいる。

一例を挙げるなら、日本の学校をモデルに置くと、子どもたちがカバンを背負って登校するのは、あたり前の光景になる。しかし、現地の学校に子どもを入れ、その子どもがカバンを持たずに登校すると、カバンの必要性に疑問が生じてくる。少なくとも、小学校低学年ぐらいは、重いカバンを背負わなくともよいのではと思えてくる。

しかし、夏休みに入ると、在留邦人の多くは、日本へ里帰りをするか、あるいは、めったにない機会だからと、観光旅行に出かけたりするので、休み中の子どもについて言及しているレポートは少ない。

そうした中で、夏休み中の生活について記述の見られる数少ない例として、江崎真佐子さんの『江崎玲於奈一家のアメリカ日記』からの引用を行っておこう。

「1年の登校日が180日(日本は250日)というこの国では、6月の20日ごろから9月の最初の週にかけて気の遠くなるような長い長い夏休みがある。……イースターの終わる頃からニューヨーク・タイムズの日曜版にじゃんじゃか子どものためのサマーキャンプの広告がおめみえする。……レクリエーショナルとよばれる“何でもします”キャンプから、ス

スポーツキャンプ、音楽キャンプ、山のぼり、ヨットのり、飛行機操縦、それに新顔として、肥満児のやせるためのキャンプなど、まさに絶花ざかり」

「定評のあるキャンプは8週間の期間で、少数が4週間、1週間区切りの特殊なものもある。週当たり300ドルなりのデラックス版からYMCAなどの経営する100ドル以下のキャンプなど料金はまちまち」

と言う。

たまたま、2冊の本からの引用を試みたがアメリカの場合、

1. 夏休みが、6月20日頃から80日も続く
2. 休み中の子どもを対象として、多様なプログラムが組まれている
3. 8週間などの2か月近い長さのプログラムが主流を占める
4. 主催者にもよるが、30万円を超える高額のプログラムが多い
5. 「サバイバル」(Survival)の言葉がよく利用されるが、自然の中での体験を重視するプログラムが多い

などを一般的な傾向として指摘できよう。

プログラムの難しさ

ここ数年来、夏休みは、子どもたちと海外で過ごす生活が続いている。ふだん、子どもを対象とした調査に従事しているだけに、休みの期間ぐらいは、子どもたちのためになる楽しいプログラムを作ろうと、企画や運営にあたってきた。

ゲームやサイパンを舞台にした小・中学生向けのキャンプや、アメリカやイギリスの家庭に子どもたちを滞在させるホームステイ・プログラムがその一例である。中でも、50名ほどの小・中学生と、ローマに降り、バスを運んで、フィレンツェ、ジュネーブ、ボンそして、パリと、2週間以上かけて、ヨーロッパ大陸を横断したプログラムは思い出深い。また、今年の夏休み、英語のわからぬ小学4～6年生をホノルルの家庭に短期滞在させるプログラムも、子どもの対応に手こずったという意味では印象に残る。

もちろん、海外のプログラムのみを担当しているわけではないが、企画段階から数えて



何か月かの準備期間がかかる上に、現地での指導も必要だから、あれやこれやに費やすエネルギーが莫大になる。それだけに、どうせ企画を立てるなら、未開拓の分野に先例を作りたいと思う。そのため、プログラムの展開にあたって、難題の多い海外での企画にタッチすることが多くなる。

グアムでのキャンプやハワイでのホームステイなどと言えば、聞こえがよい。しかし企画、そして、実施へ移るまでに、さまざまな折衝が必要となる。

国内でのプログラムも、その例にもれないが、旅行や宿泊を伴うので、まず、旅行業者の協力が不可欠となる。また、プログラムの展開には、けがなど危険性も予想されるので、社会的に信用のおける運営組織—多くの場合、財団—が必要となる。そうした旅行業界や財団が協力し、それに、実際のプログラム担当チームとが加わって、企画のつめが進んでいく。

実を言うと、プログラムの具体化に当たって、特に重要なのが打ち合わせで、まず、安全性とのかね合いで、プログラムのコストが問題になる。キャンプに例をとれば、特に、海外の場合、医師や看護婦の同行が望ましい。しかし、医療チームを、何日間か拘束するとなれば、それだけで、プログラム全体のコストが上がる。しかも、そうした安全面での配慮は目につきにくいので、ともすると、カットされやすく、その結果、医師不在のキャンプが実施される。この医師とよく似た問題は、テントや食事などの安全や衛生の全てに及んでくるので、安全なキャンプとそうでないキャンプとでは、コストの開きが大きくな



る。

さらに、プログラムに、教育的な配慮をどの程度加えるかも、コストに影響してくる。具体例を挙げるなら、子ども20人に1人の割合でリーダーをつけるのと、10人に1人の場合とでは、コストが倍ほど違ってくる。それに、子どもの指導に熟達したリーダーを集め、何度かの打ち合わせをして、現地へ臨むのと、学生アルバイトを現地へ集合させるのとでも、費用の開きが生じる。

何十人、そして、何百人の子どもを扱うのであるから、クラフトのプログラムを展開するにあたって、カナヅチやのこぎりを、何人に1つ用意するかによっても、費用の差が生まれてくる。



そうした結果、同じグアム島で4泊5日のキャンプをするプログラムでも、片方は10数万円、もう一方は、20数万円というように、10万円以上、コストが開いてくる。

しかも困ったことに、安全や衛生や生活指導面への配慮は、パンフレットに載りにくい性格だけに、親としては、一般商品を買うのと同じように、少しでも安いプログラムへ、わが子を送りやすい。その結果、危険性の高い、教育的に疑問の多いプログラムにたくさんの子どもが参加し、良心的な企画に応募者が少ない現象が生じがちになる。

キャンプの持つ意味

すでに触れたように、夏休みを海外で過ごす機会が多いので、アメリカのプログラムのいくつかは、実際に見聞してきた。そして、先ほどの紹介文のとおり、子どもにとって楽しく、かつ有意義なプログラムが多いという印象を強く感じる。そうであるから、わが国でも、せめて、まねごとぐらいはしてみたいと、企画や立案にタッチするのだが、見通しの暗さは否定し難い。

なにしろ、日本の場合、キャンプ・プログラムに例をとれば、平均3泊4日の日程が多く、長くても、5日が限度となる。しかし、3泊では、午後、キャンプ場に到着、就寝し、1日おいた次の日に、サヨナラ・パーティを開かねばならない。そのため、純粋にのんびりできるのは、まん中の1日しかない。これでは、ゆとりを持ったプログラムの展開は不可能で、学校の授業以上に、過密なスケジュールが組まれる。

正直なところ、こうしたプログラムでは、子どもたちを心身ともに、健やかにたくましくすることなどは望み難く、結局、楽しい思い出でも残してやろうという程度のイベント型のキャンプとなりやすい。

そして、こうした状況は、海外のキャンプも例にもれず、5泊6日程度が、長さの限界となる。

現代の子どもたちは、学校と家庭とを往復する生活を送っているから、夏休みぐらい、のんびりと、しかも、充実した生活を送ってほしいと思う。特に、子ども向けのキャンプ

などは、

- 1 知らない友と触れ合う機会を持てる
- 2 さまざまな体験を重ねられる
- 3 自然と触れ合う機会を持てる
- 4 広い空間を使った遊びを展開できる

など、今の子どもたちの持つ弱さを克服できる特効薬的な機能を期待できよう。

しかし、現実のプログラムは、すでに触れたコストにからんだ安全面への不備や日程の短かさなど、あまりに多くの問題をかかえており、子どもの成長に、あまりプラスしないものが少なくない。

考えてみると、キャンプに限らず、ホームステイやスキースクールなど、休みを利用するプログラムを教育的に運用するのは予想以上に難しい仕事である。

なぜなら、学校の場合、指導要領や教科書などの標準的なカリキュラムがある上に、決

められた校舎や教室があり、学級の子どもたちは、1年以上、同じ集団として生活を送る。しかし、休みのプログラムは、

- 1 見ず知らずの友が集まり
- 2 特に決められた校舎や教室があるわけでもなく
- 3 臨機応変にプログラムを組みながら
- 4 夜間も含めて、24時間の指導を
- 5 危険と背中あわせの状況の中で

展開していかなばならない。特に、子どもたちの自主性を尊重しようとすればするほど、危険に近づきやすい。かと言って、安全第一主義では、せっかく、自然の中に活動の場を求めた意味が薄れてしまう。

こう書き綴ってみると、夏休みのプログラムの指導者には、学校の教師以上の力量が求められると言わざるを得ない。しかし、そうした人材を養成するプログラムは、いくつかの団



体の手で、細々と行われているものの、組織だった取り組みはなされていない。その結果当然のことながら、有為の人材を求めにくいのが現状で、こうした面からも、プログラムが貧困になる。

夏休みの考え方

冒頭でも触れたとおり、昨年の夏休み、小・中学生を連れて、ホノルルを訪れた。ホームステイをさせるのを主目的とするプログラムだが、ホノルルへ着いた日が、まず大変だった。初めての外国、しかも、飛行機で長旅を



してきたので、時差も手伝って、体調の悪さを訴える子どもがいる。そうかと思えば、嬉しさのあまり、寝つかれない子どもも出てくる。そのため、カウンセラーたちは、夜中の3時過ぎまで、ベッドへ入れなかった。と言っても、翌朝は、子どもたちに朝食を食べさせねばならないから、遅くも、7時起きが義務づけられている。

同じ朝食を食べるなら、アメリカらしいところがよいと、子どもたちをファーストフードレストランへ連れていく。そのとたん、グループ・リーダーは通訳とならざるを得ない。保母(父)役から添乗員、教師、体育のインストラクター、教育相談員など、一人数役をこなすのが、グループ・リーダーの職務である。

そうした大役を果たしてもらうので、プログラム全体をスムーズに展開するために、計画を煮つめるのと平行して、グループ・リーダー選びが必要となる。

こうした機会に、楽屋落ちに近い話を書き綴ってきたのは他でもない。アメリカの夏休みほど長くはないにしても、日本の夏休みも1か月以上に及ぶだけに、夏休みの間に、学校や家庭での生活では体験できない何かを、子どもたちに学ばせたいと思うからである。

都会の子どもたちなら、山村や海辺で、2～3週間を過ごすのもよいし、山村の子どもたちが、大都市の中で、10日間を送るのもすばらしい。夏休みが終わった後、この夏は、これをやったと思えるようなビッグな体験をさせたいのである。

しかし、現在でも、ラジオ体操や絵日記、夏休み用のドリル、自由研究など、学校は通常の学校の延長線上に夏休みをとらえている。



そして、安全面の保証や教師の休暇などの関連から、臨海や林間学校などをとりやめている学校が少なくない。

学校のあり方として、臨海学校などの中止はやむを得ないと思う反面、家庭だけの力では、多くの友といっしょに自然に触れ合う機会などは作り得ない。となると、学校とは別に、休み期間の子どもたちに、さまざまな体験の場を提示してくれる機関の存在が不可欠となる。しかし、残念ながら、アメリカのような受け皿を見い出し得ないのが現状である。

もう一度、ホノルルの事例へ戻ると、本土ほど、大規模でないにしても、現地の子どもたちは、民間団体の主催する島めぐりのキャ

ンプから、YMCA主催のミニ・キャンプ、そして、市の主催する学校を利用してのキャンプなど、それぞれの状況に応じて、さまざまなプログラムに参加していた。

アメリカの事例が最善というつもりはないが、アメリカと対比させて日本の現状を考えると、日本の夏休みは、子どもたちが、ダラダラと家庭の中で毎日を過ごすだけで、休みの過ごし方について、きちんとした見通しに欠ける思いがする。そこで、今回は、子どもたちが、どんな気持ちで、どのような夏休みを送っているのかを、アンケート結果を中心として紹介することにした。

調査レポート／夏休み

渋谷区立猿樂小学校教諭 土橋 稔
船橋市立高根台第一小学校教諭 新井 誠
奈良教育大学教授 深谷 昌志

要 約

① 旅行とキャンプ

夏休みの中で、なんと言っても楽しいのは、旅行とキャンプである。
(図3)



② 計画倒れ



夏休みに、計画をきちんと立てて守ろうという子どもは25%にすぎず、半数近い子どもは「なるべく守ろう」という程度にとどまっている。

(図7)

③ 勉強はいや

夏休みに、勉強をしようと思っている子どもは12%にすぎず、44%の子どもは勉強をあまりしたくないと答えている。(図14)



④ 旅行は家族と



子どもにとって楽しい旅行は、平均すると、家族といっしょ(64%)に、2~3泊(47%)を1回(41%)ぐらいとなる。(図19)・(図20)・(図21)

⑤ テレビ

旅行やキャンプを除くと、通常の夏休みの毎日は、テレビを見たり、勉強したりして暮らしている。(図16)



⑥ 自由研究

自由研究をした子どもは58%だが、その大半は、夏休みに入る前後に自分でテーマを決めて勉強している。(図24)・(図25)



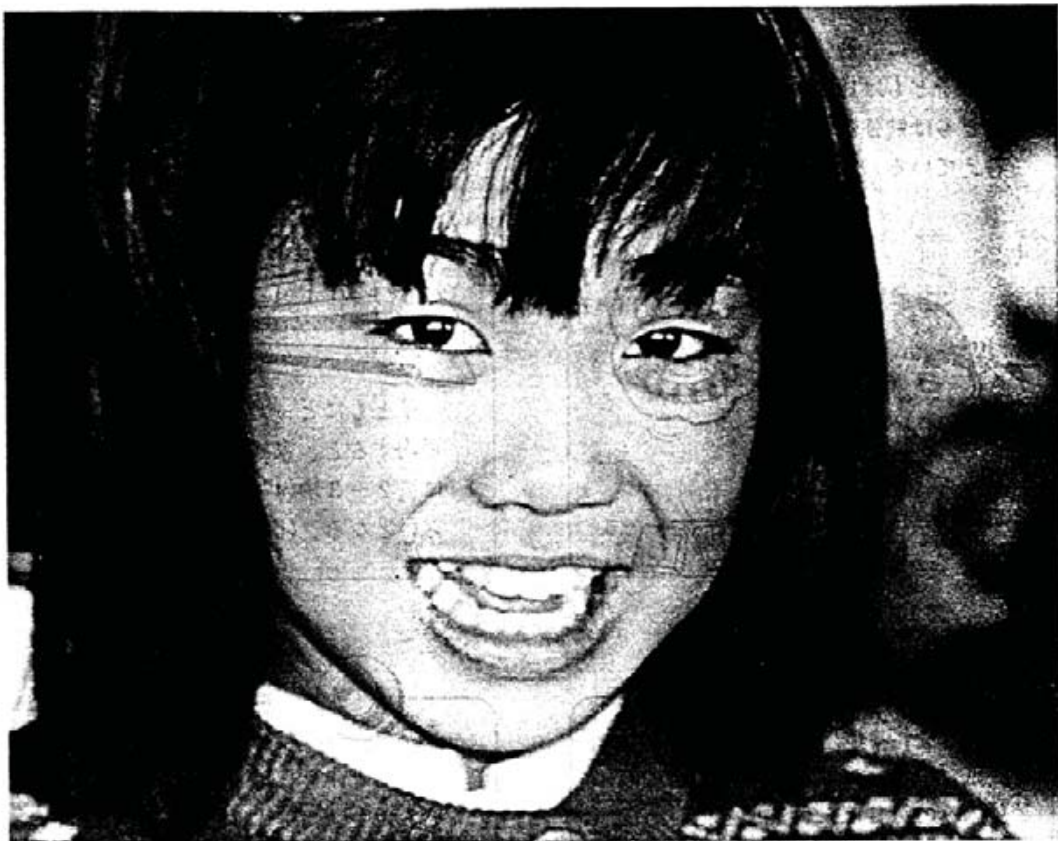
サンプル数 (人)

学年/性	男子	女子	計
4年	239	206	445
5年	418	372	790
6年	303	254	557
計	960	832	1,792

調査概要

対象・東京都・千葉県の小4・5・6年生 計1,792名
 時期・昭和57年6月
 方法・学校通しによる質問紙調査

1. とても楽しい夏休み



7月ともなると、子どもたちの顔はうきうきしてくる。教室のあちこちから、楽しそうなはずんだ声が聞えてくる。「もうじき夏休みだね。ほくね、キャンプに行くんだよ」「私は、この夏こそ、泳げるようになるわ」

だが、いざ暑い長い夏休みとなり、学校での学習から解放され、子どもたちが40日余りの自由な時間を手に入れた時、その長い自由な時間に取り組む子どもたちの姿は、目は、喜びに満ち生き生きとしているのだろうか。それとも、長い時間をもてあまし、漫然とダラダラとした張りのない生活を送ってしまっているのだろうか。

94%の子どもが楽しいと感じている

まず、子どもたちがどんな気持ちを抱いて夏休みを過ごしたのかから探っていきたい。図1は、「去年の夏休みは楽しかったですか」という質問をした結果である。図1が示すように、夏休みが「とても楽しかった」とする子どもが66%を占め、「わりと楽しかった」まで含めると94%に達する。一方、性別による差はほとんどないが、「あまり・ぜんぜん楽しなかった」と答えている子どもが、4年3%、5年5%、6年10%と、学年を追うごとに増えていく。こうした学年差も気がかりだが、その考察は後に行うことにして、ここではまず夏休みの楽しさをもう少し明らかにしていくことにしよう。

「早くこいこいお正月」と歌われるように、子どもたちは冬休みを心待ちしている。また遠足も、子どもたちにとってもっとも楽しい

学校行事の1つである。それでは、冬休みや遠足の楽しさに比べ、夏休みの楽しさを、子どもたちはどう受け止めているのだろうか。その結果を示したのが図2である。まず図2-①で、冬休みの楽しさと比べると、「絶対夏休み」とする子どもが53%と半数を超え、「夏休みの方」まで含めると8割近くにものほる。休みの期間が長いだけでなく、季節も夏、子どもにとっては、水泳など遊びに向いたシーズンである。それだけに、夏休みの方が楽しいのは当然であろうが、また遠足と比べた場合でも図2-②のように、「絶対夏休み・夏休みの方」まで含めると、8割近くが夏休みの方が楽しいと答えている。なお、性別で見ると、男子の方が「絶対夏休み」と答えている割合が高い。

図1・夏休みの楽しさ

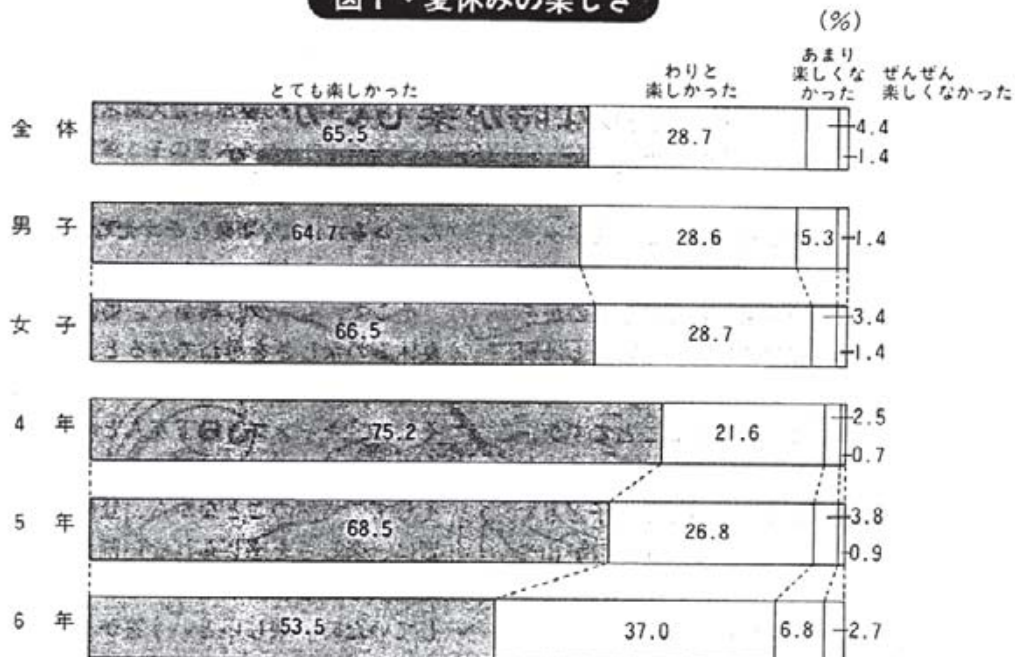
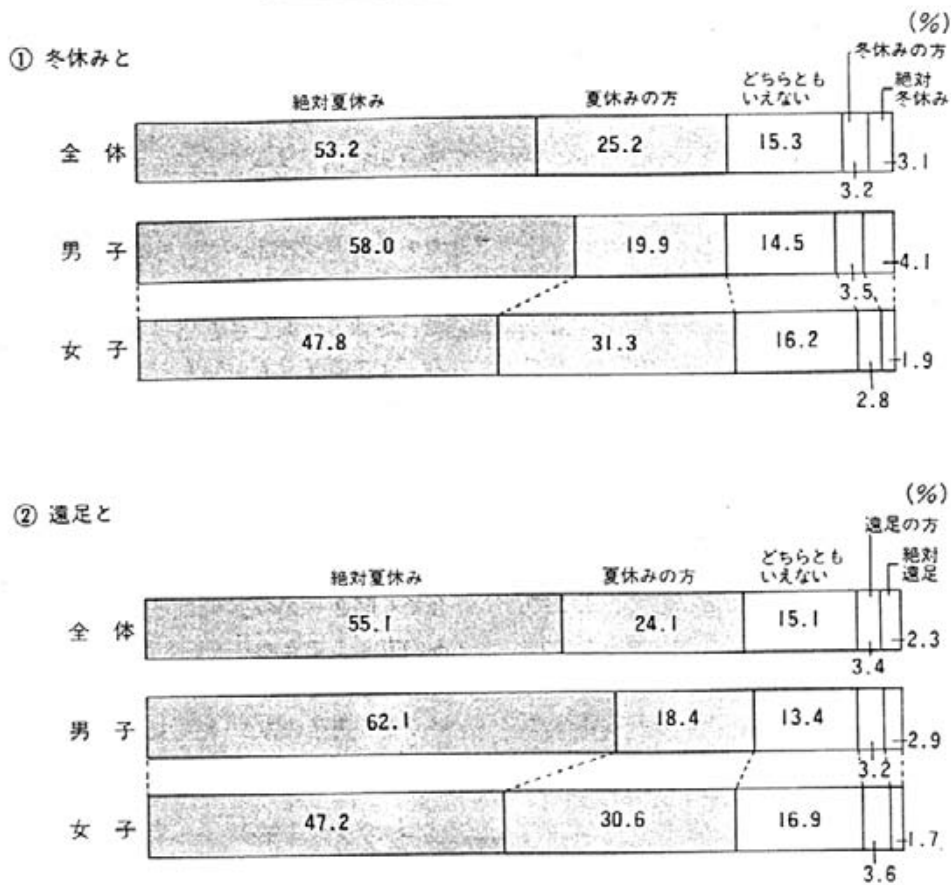


図2・夏休みの楽しさの比較



どんな時が楽しいか

冬休み、遠足よりももっと楽しい夏休み。この楽しさの中味に接近するために、夏休みの中でどんな時に一番楽しいと感じるのかを調べてみた。具体的には、アンケート調査とは別に実施した「夏休みの生活記録」の中で「夏休み一番楽しかったことはどんなことですか」と尋ねる形をとった。自由記述させたもののいくつかを表1にまとめてみると、子どもたちは、知らない土地を旅行した感激、海・山や田舎へ行き、豊かな自然の中で伸び伸びと遊んだ思い出、友人とのキャンプ、プール、テレビを思う存分見たこと、などを挙げている。読

んでいるだけで、「楽しそうだな」という気持ちを抱かせる内容である。

そこで、もう少し細かく、場面を分けて、夏休みの楽しさを尋ねてみると、図3のとおりとなる。なんと言っても楽しいのは旅行そして、キャンプ。以下友人との遊び、プール、自分の趣味のことをしていた時などが続く。そして、当然のことながら、登校日や夏季講習に、楽しさを感じられない割合が5割を超える。しかし、同じ勉強でも、「自由研究をしていた時」楽しいという答が7割近くに達していることに注目したい。

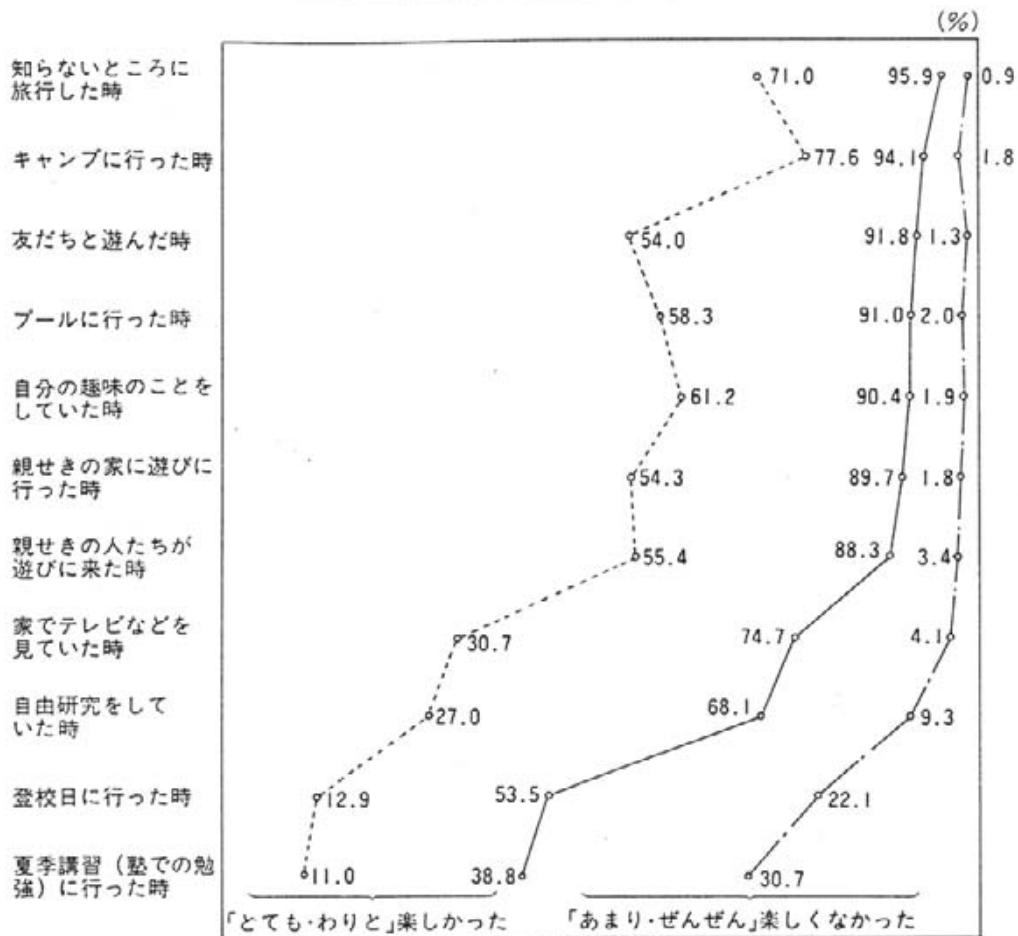


表1・夏休み一番楽しかったこと(抜粋)

1. けむりがもうもうと出ている阿蘇山を見たこと。
2. 鹿児島島の海がきれいだったこと。
3. 海へ行って遊んだこと。
4. サファリ・パークへ行って野生の動物を近くで見たこと。
5. アルプス公園のアスレチックでおもいきり遊んだこと。
6. 田舎で乗馬をやったりサイクリングをしたこと。
7. 田舎へ行ってせみやちょうを捕えたこと。
8. おばあちゃんの家でバーベキューをしたり、動物と遊んだこと。
9. 子どものキャンプに行き、キャンプファイアをしたこと。
10. 子ども会で少年自然の家へ行ったこと。
11. リトルリーグの人たち20人ぐらいで、実際に横浜スタジアムで野球が見られたこと。
12. 広島へいったとき、体長15cmのコチをつったこと。
13. 川でいとこと一緒にフナを岩からおい出し網ですくったこと。
14. 友だちの家に泊まりに行ったこと。
15. 学校のプールに毎日のように行けたこと。
16. ワンパランドのプールのとびこみ台からとびこんだこと。
17. 水泳大会に出場し、選手宣誓をしたこと。
18. 親と子の夏休みコンサートをまきにいったこと。
19. 映画や遊園地に遊びに行ったこと。
20. テレビをいっぱい見れたこと。



図3・夏休み楽しかったこと



もっと夏休みを

これまで、夏休みの楽しさについて考察を進めてきた。高学年になるにつれて、ややかけりを生じてくるものの、子どもたちにとっては、やはり、夏休みはもっとも楽しい時期らしい。しかし、親たちの中には、子どもの夏休みをありがた迷惑に思う者も少なくないし、教師の目からしても、生活が乱れてしまう子どもが目につく。したがって、おとなたちにとっては夏休みに両手を挙げて賛成しかねる面もあろうが、念のため、子どもたちに、夏休みの期間が長いかどうか尋ねてみた。図4のように、夏休みが早く終わればよいと思

っている子どもは、「いつも・時々思った」を合わせても14%にすぎず、「ぜんぜん思わなかった」子どもが7割に達する。つまり、当然のこととはいえ、長い夏休みをもてあまし、退屈した生活を送っている子どもは例外に属するらしい。

それでは、子どもたちは、夏休みの長さほどの程度が望ましいと思っているのか。それを尋ねた結果をまとめたのが図5となる。夏休みが「51日～60日」あったらと思っている子どもが32%と最も多く、91日以上というビッグな夏休みを望むものも2割を数える。

したがって、「41日以上」と、現在の夏休みよりも長い自由な生活を望む声は8割にのぼる。しかしなぜか、「30日以下」ともっと短い夏休みの方がよいという子どもが8%いるのには興味を覚えた。

もっともっと長い夏休みを望んでいる子どもの姿が浮かびあがってきたが、ここで夏休み中の子どもたちの生活に目を向けてみることにしたい。

図4・夏休みが早く終わればいいなと思うこと

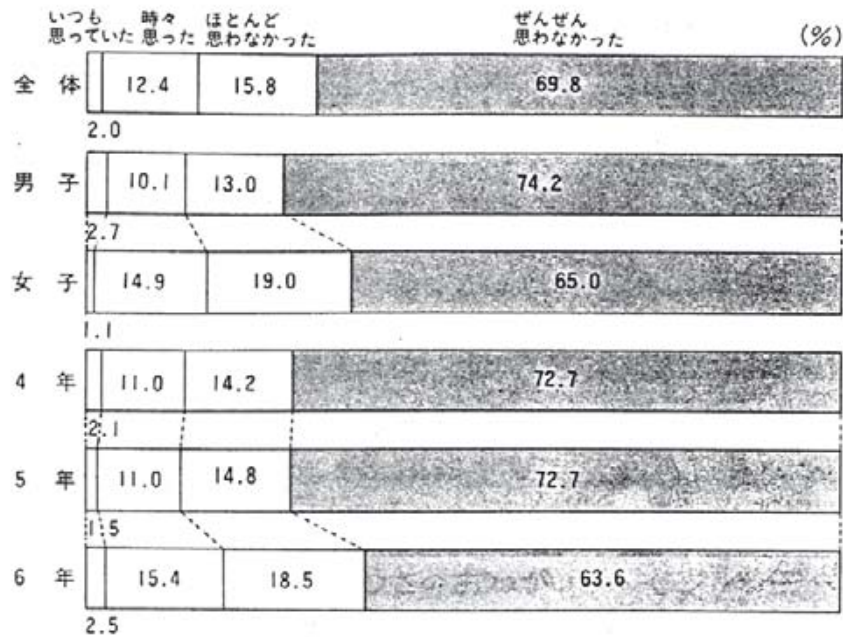
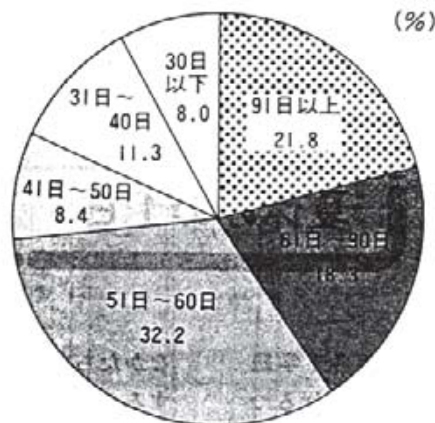


図5・子どもの望む夏休み期間



2. 夏休みの生活



前章では、夏休みの楽しさの概要を紹介してきた。旅行に行ったり、キャンプをしたりというようなトピックスとしての楽しさは、ある程度予想されるものであった。しかし、夏休みのすべてがその楽しさで満たされているわけではない。40日余りの、いわゆる日常の生活があるはずである。ここでは、長い夏休みを子どもたちが、どのように過ごしているのかを探ってみることにしたい。

夏休みの1日

夏休みに入る前に、4～6学年各1学級を対象として、夏休みにどんな1日を送るつもりか、予定表を書いてもらった。そのよう

なかたちで得られた1日の生活の予定を要約すると、以下のとおりとなる。

「朝は6時に起きて、ラジオ体操に行く。帰って来てお腹のすいたところで朝食をとり、朝の涼しいうちに2時間程度の勉強をする。そして、10時から午後5時までの7時間が昼食をはさんでの自由時間となる。束縛のない開放された時間である。この間に友だちと外で遊んだり、プールに行ったり、テレビを見たりする。

そして、5時には遊びを止め、帰って夕食の手伝い、夜はテレビを見て、寝る前に読書や勉強をする。



そして、9時を過ぎると、そろそろ布団の中へ……」



いかにも夏休みらしい生活の過ごし方で

- ①起床時間が早い
- ②午前中に勉強
- ③午後は自由時間
- ④夜は、テレビと読書、勉強

という時間の使い方が一般的であった。

図6にいくつかの例を示したが、6時に起床してから夜の9時すぎまで、子どもの頭で考えたらしい予定が組まれている。こんなに計画的に生活のできるはずはないが、予定表の段階で中には図6-④のように、テレビの比重の高い子どもや、図6-⑤のように熟読いを日程に組み入れている子どもも見受けられる。

図6・夏休みの計画表

① **ちょうさのおねがい**
 これは成績には関係ありません。日本の子どもたちにたくさんおねがいを
 夏の生活を彩るためのものです。ありのままに記述してください。
 1. 夏休み前に「7日の生活の予定表」を作ってください。

時間	0時	1時	2時	3時	4時	5時	6時	7時	8時	9時	10時	11時	12時	1時	2時	3時	4時	5時	6時	7時	8時	9時	10時	11時	12時	
計画						すいみん			勉強 2時間	自由 2時間30分	自由 4時間30分			読書 1時間	テレビ ふ3等 3時間											

2. 夏休みが終わって、あなたの1日の生活はどうでしたか、最も多かった1日の生活を下の表に書いてください。

時間	0時	1時	2時	3時	4時	5時	6時	7時	8時	9時	10時	11時	12時	1時	2時	3時	4時	5時	6時	7時	8時	9時	10時	11時	12時	
生活						すいみん			勉強 2時間	自由 2時間30分	自由 4時間半			読書 1時間	テレビ ふ3 3時間											

計画は実行されているのか

それでは、この予定表はどの程度実行されたのか。図6の下欄を上欄と対比させて明らかかなように、

- ①起床が予定より遅くなる
- ②予定どおり、勉強できなかった
- ③テレビをつい見すぎてしまう

などが目につく。そこで、もう少し一般化した形でアンケート調査をとおして、予定表の実行率を見ようとしたのが図7である。まず、予定表を作る時、計画を立て、その計画をも

とに規則正しい生活をしようと思っているのは、約4分の1にとどまり、一応計画は立てたものの、最初から守ろうとしていない子どもが27%に達する。とりあえずそのとおりにできないのを承知の上で、予定表を作ったのであろうか。したがって、実行度を見ると当然のことではあるが、「かなり」を含めても、実行できる子どもは5割を下回っている。

規則正しい生活をしているかどうかを示すバロメーターとなるものは、起床時刻と就寝

図7・計画どおりの生活

目 標	絶対しよう		なるべくしよう		あまりしたくない		ぜんぜんしたくない	
	25.3	48.1	17.9	8.7				
実 行	13.8	35.2	40.7	10.3				
	とてもよくやった	かなりやった	あまりやらなかった	ぜんぜんやらなかった				

図8・起床・就寝時刻

①起床時刻 (%)

決まっていた 58.8					決まっていなかった 41.2	
6時	6時30分	7時	7時30分	8時		
13.9	29.2	19.3	12.9	9.2	15.5	

②就寝時刻

決まっていた 51.0			決まっていなかった 49.0	
9時	10時	11時		
38.1	41.8	15.0	5.1	

時刻であろう。図8に示したように、起きる時刻や寝る時刻が決まっていたものが約半数。また、決まっていた中でも起床が8時以降になったり、就寝が10時以降になってしまっていたりする子どもが少なくない。計画はあくまで予定で、夏休みに入ると、つい、伸び伸びと時間を過ごしてしまうのであろう。

さらに、図9に領域を分けて夏休みの計画と、その実行の程度を示しておいた。友人と外で遊ぶ、プールに行く、ラジオ体操に行く、など主として、遊びについては計画の6〜7割を実行している。しかし、早寝や早起き、手伝いなどは思っていたことの半分もできなかったと、子どもたちは答えている。

もっとも夏休みは、文字どおり休みなのであるから、学校のある時と同じように規則正し

い生活を送る必要はないのかもしれない。しかし、図10が示すように子どもたちは、予想される以上に、まじめに夏休みをとらえている。休みだからと言って、まんがを読んだり、テレビをたくさん見ようと思っている子どもは2割前後で、その他の子どもは、だらしない生活を過ごすつもりはないと答えている。そうは言っても、先の図9のように、ついダラダラとしてしまうのが、夏休みの実態なのかもしれない。

しかし、図11に示したように親たちも、子どもの生活の乱れには気を配っているようで

- ①無駄づかいをするな
- ②テレビを見すぎないように
- ③夜ふかしをするな

などを中心に子どもに注意を与えている。

図9・夏休みの計画と実行

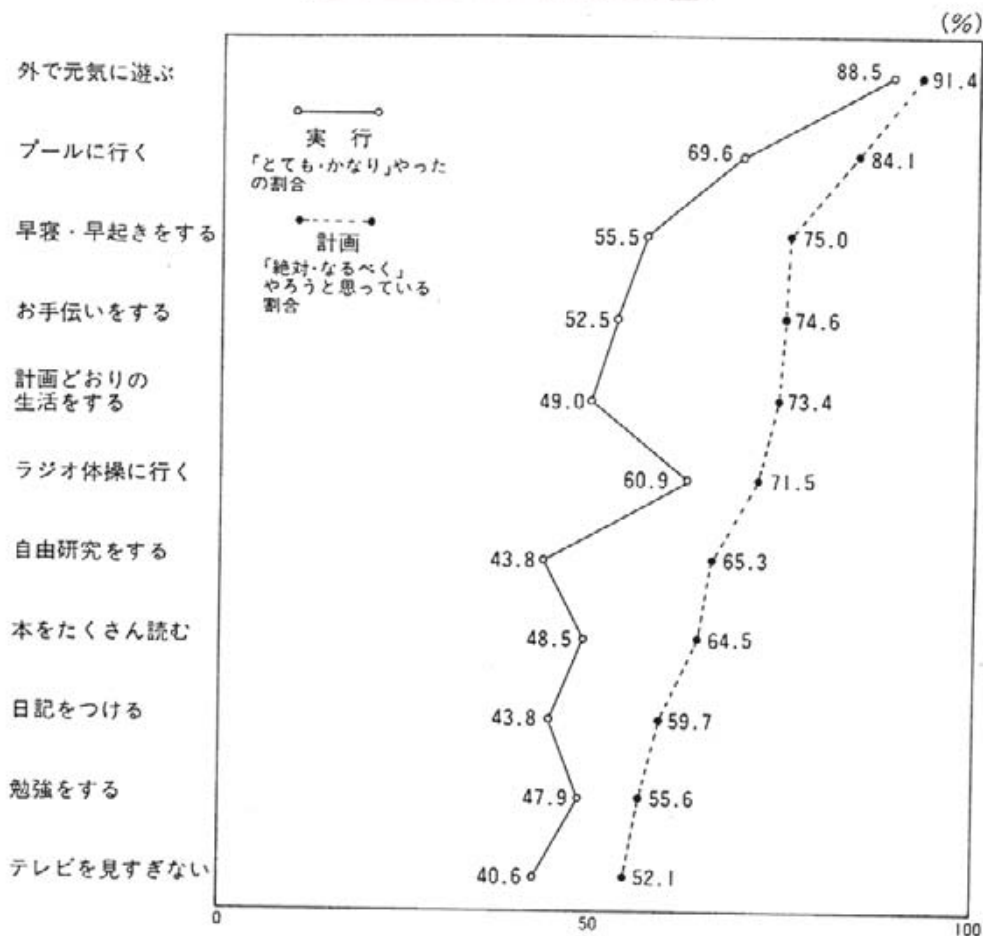
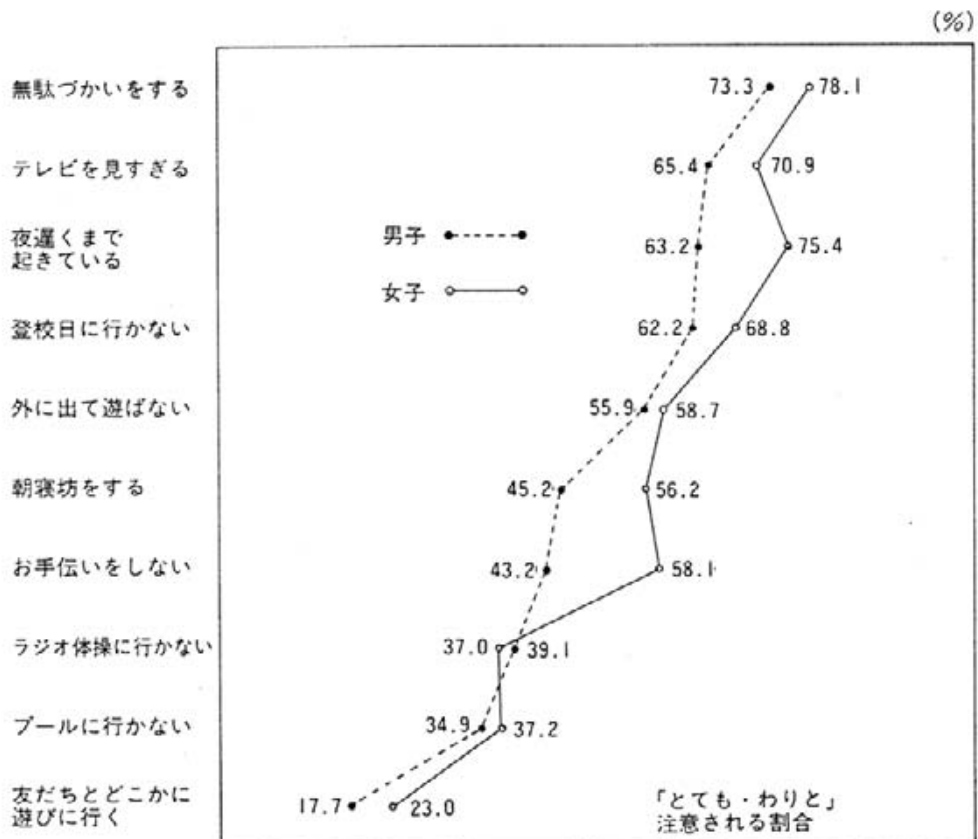


図10・夏休みにしたいこと

	(%)		
	絶対・なるべく しよう	あまりしたくない	ぜんぜんしたくない
テレビをたくさん見よう	26.6	50.1	23.3
まんがをたくさん読もう	22.4	43.3	34.3
夜ふかしをしよう	23.0	45.3	31.7
朝寝坊をしよう	15.2	36.9	47.9
家の中で ゴロゴロしていよう	10.1	36.4	53.5

図11・親の注意の仕方



夏休みの宿題

「楽しい夏休み」を望む子どもたちの気持ちはわかる。しかし、学校としては、そうした子どもの心情を理解しつつも、夏休みに入る前「朝の涼しいうちに勉強を」とか、「夜寝る前に1日のまとめを」などといった指導を加えることが多い。そして、そうした指導との関連で、夏休みの自主的学習の手助けとして宿題を課する形が一般化している。

そこで、どんな宿題が出されているのかをまとめたものが、図12である。算数の問題、漢字練習といったドリル的なものや、日記、読書、絵、工作など比較的簡単に取り組めるものが多く、理科、社会などの観察、研究、

作文、感想文などが少ないのが目につく。また、全体的に見ると一番多い算数の問題でも59%と、宿題の量はさほど多くないような印象を受ける。

宿題を一応出すが、休みの楽しさを損なわない程度にしよう。そうした学校側の配慮に呼応するかのように、子どもたちも、図13に示すとおり、「宿題は少しはあった方がよい」が7割に達する。また、宿題のやり方も何日かで片つけてしまおうと「まとめてやる」のでも、最後に「あせってやる」のでもなく、出された宿題を毎日計画的に取り組んでいる子どもが6割を超える。

図12・夏休みの宿題

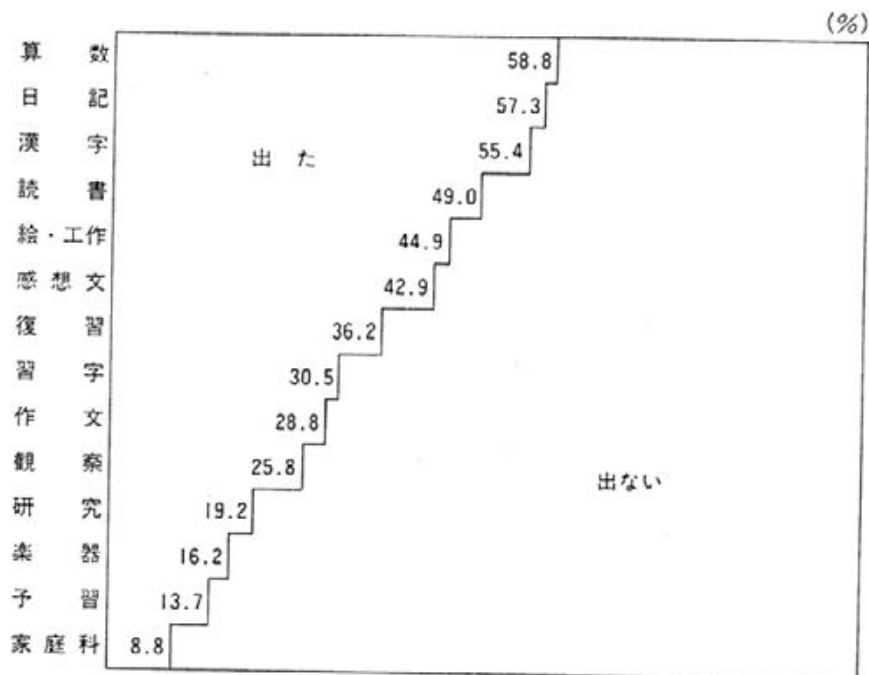
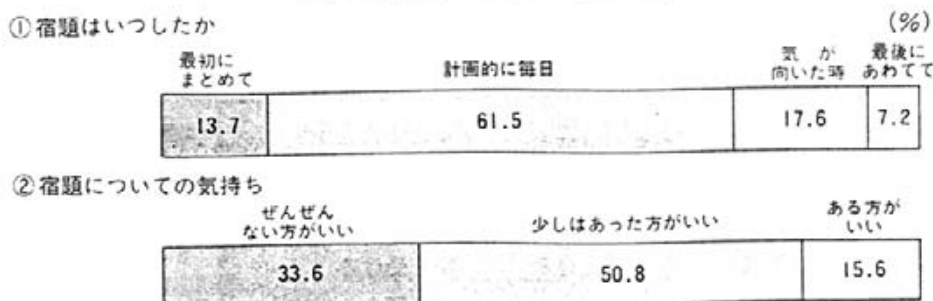


図13・宿題の取り組み方



勉強についての気持ち

長い夏休みの間、自主的に学習計画を立て勉強に取り組むのは大変なことであろう。勉強についての意欲と、その実行度を見たのが図14である。全体で1割強の子どもたちは、「絶対にしよう」と思っていたと、その決意のほどを明らかにしている。しかし、「あまり・ぜんぜんしたくない」に「なるべくしよう」まで含めると、9割近い子どもは休みに入ったら、多少なりともものんびりしたいと考えている。そして、「勉強したくない」と卒直な気持ちを表した子どもも、半数近くを数える。

そして、実行度についても意欲そのままに反映して、「かなりやった」を含めて、勉強をしたいと思っている子どもは、5割弱にとどまっている。

それでは、子どもたちは、どんな勉強をし

ているのだろうか。夏休みの勉強として考えられる14項目について、その計画と実行度を尋ねた結果が、次の図15である。算数の問題や漢字練習など、読み書きそろばん的な内容は、8割近い子どもたちが行っている。以下、読書、絵、工作、日記など、夏休みらしい勉強をしている子どもの割合も多い。ただ、ドリル的な学習が中心を占め、夏休みという長い期間を使った理科の観察、社会科の研究、また自分の体験を綴る作文や、読書感想文などを行っている子どもの割合は少ない。

観察や実験などとなれば、それなりの計画性が必要となる。しかし、そうした長期的な見通しを伴う学習を小学生に望むのは、無理な注文なのかもしれない。

図14・勉強への意欲と実行

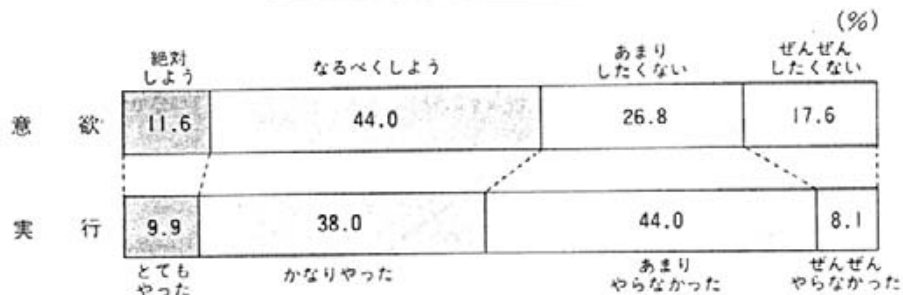
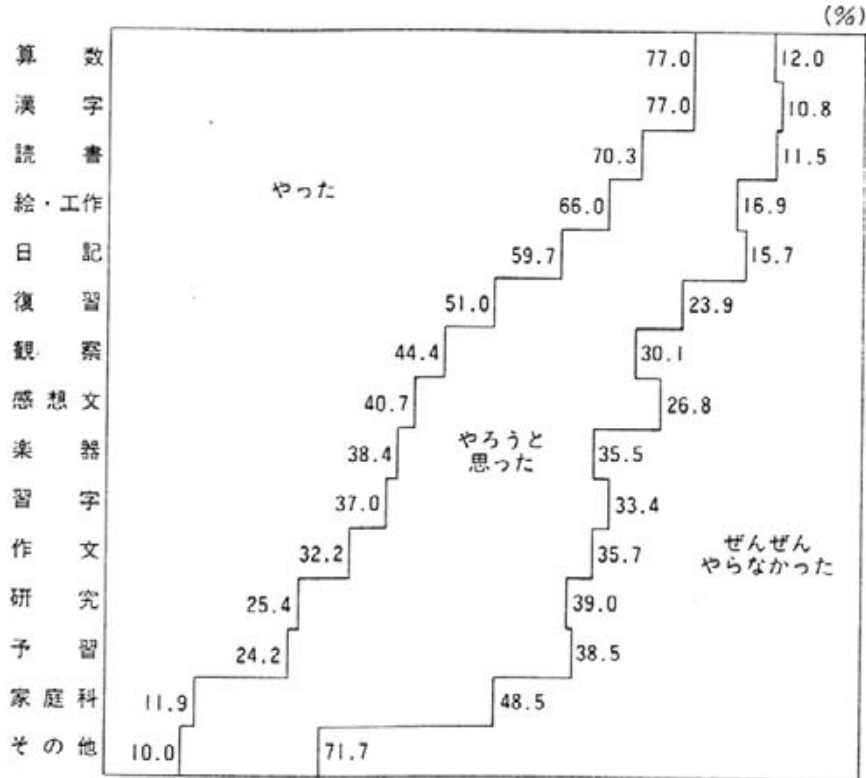


図15・夏休みの勉強



子どもたちの生活記録から

これまで、アンケート調査の結果をもとに子どもたちの夏休みの生活を概観してきた。本調査では、図6に一例を示したように、アンケートとは別に150人の子どもたちに、夏休みの生活記録を書いてもらった。その中でテレビ、勉強、手伝い、などの9項目に分けて、その日に、そうしたことがあれば○、なければ×を付けさせることにした。夏休みは42日あるから、毎日そうしたことをすれば、○は42つく計算になるし、1日もしていなければ○は1個もつかない。そこで○の数をカウントし、

Aタイプ=○が0~13個=ほとんどしていない

Bタイプ=○が14~27個=時々した

Cタイプ=○が28~42個=毎日のようにした

のように分類してみた。その結果をまとめたのが、図16である。図から明らかなように、子どもたちの生活は、「テレビを見」「勉強をし」、そして時折「手伝いをする」で終始し、当然のこととは言え、旅行をしたい、友だちの家に行くのは、休み中に何回もない晴れがましい日のように思われる。しかし、休み中なのにもかかわらず、友だちとの外遊びをしている子どもが少ないのは気がかりであった。

これらの結果をもう少し細かく、夏休みを前期(7月いっぱい)中期(8月15日まで)後期(8月いっぱい)の3期に分け、友だちとの外遊び、プールについて集計したのが、図17-

①～②である。さすがに8月の下旬ともなると、夏休みの宿題や自由研究に追われるためか、友だちと外遊びをしたり、プールへ行く子どもの割合が減っている。

始まる前は楽しみだが、いざ夏休みに入るとそうした楽しい日々は、それほど多くはなく、勉強をする以外はテレビを見たり、家の

中でゴロゴロして毎日を過ごすのが夏休みの実態なのかもしれない。なお、アンケート調査の結果でも、図18のように「家の中で、ゴロゴロしていることがあった」という子どもたちが約4分の1ほどおり、しかも、その傾向は高学年になるほど強まっている。

図16・夏休みの過ごし方

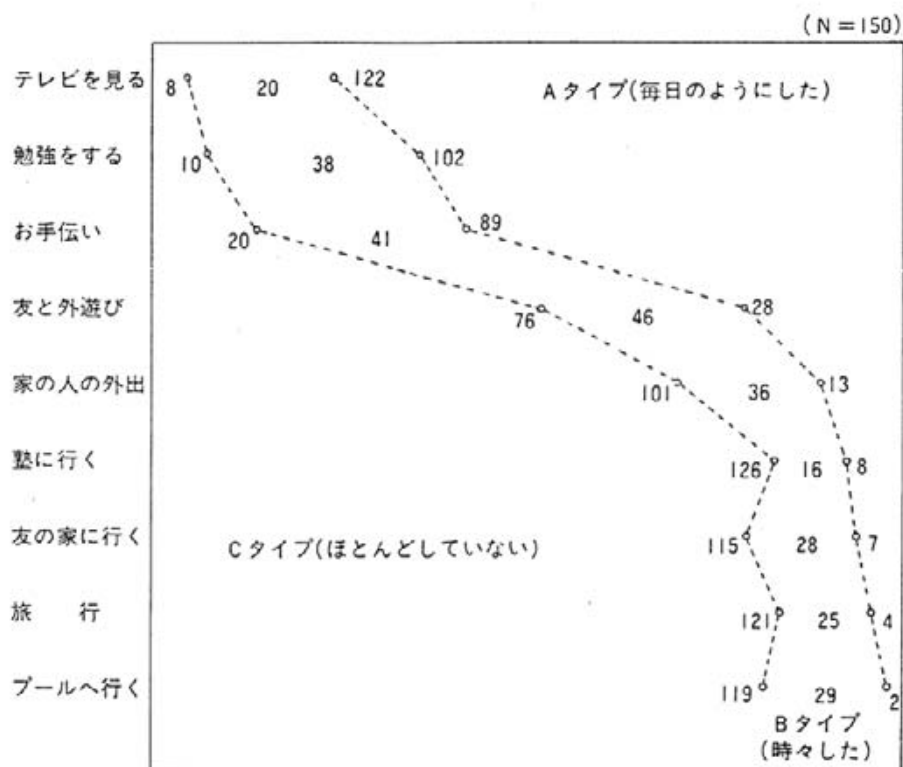


図17-①・プールに行く

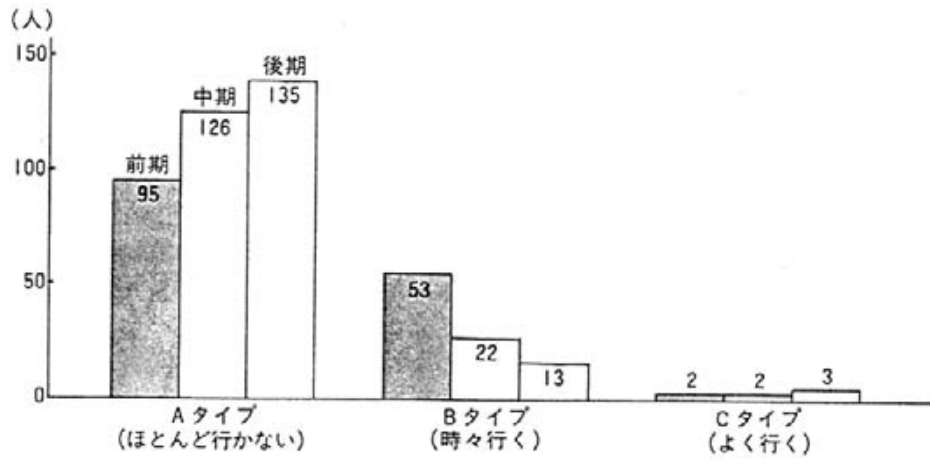


図17-②・友人と外で遊ぶ

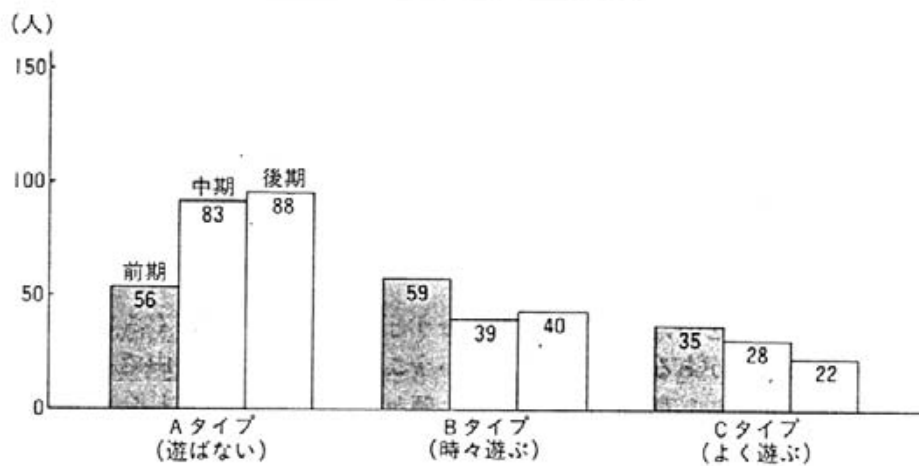


図18・退屈な日(家の中でゴロゴロしていたこと)

